# 3．オリンピックの象徴・概念

## －より早く、より高く、より強く：Citius, Altius, Fortius－

早川　武彦

今年の韓日ワールドカップTMは、オリンピック大会を凌ぐ観戦者、視聴者の見守る中、ホスト国として決勝トーナメントに進出でき、多くの成果や教訓を得て終了した。そこではオリンピック大会以上に「勝利」が問題となる。しかし、オリンピック大会は単に雌雄を決することや記録更新といった結果主義に終始するものではない。それは、「遊戯、儀式、祝祭、壮観、というパフォーマンスの諸ジャンルの、文化・精密化・多層化が同時に進行する過程」であり、この「多脈的パフォーマンス体系」の発達が「異様なまでの世界的な関心を集め、ほかの如何なるパフォーマンスにもまして、まさに世界史的展開を劇的に肯定する最大のイベント」[1]を創りあげている。そこには入念に仕組まれた人間的なロマンが宿されている。このロマンに世界中の人々が魅せられる。近代オリンピックの創設に情熱を燃やし、生涯をそれに捧げたクーベルタン；Pierre de Coubertinのスポーツ・教育思想にまたそれを見ることができる。[2]

クーベルタンのオリンピックに対する思いは、1935年8月4日におこなったドイツでのラジオ演説；「近代オリンピズムの哲学的基礎」[3]に示されよう。オリンピズムの特徴は、①競技信仰の観念（religio athletae)、②高貴さ(aristocratie)つまり精粋(élite)の観念、③“城内平和”の観念(L'idée trêve)、⑤４年に一度のリズムの観念、⑥人類の春(printemps humain)であり、若々しい成人(juene adulte)を祝福する観念、⑦成人男性個人(l'adulte mâle individuel)がヒーローの観念、⑧聖苑(Altis)あるいは聖域(encente sacrée)の観念、そして⑨芸術と精神を加えた美(beauté )の観念を有している。しかしこれらの特徴や観念について十分解明されているとは言い難い。クーベルタンが描いたスポーツ教育学、オリンピズムにおける多様なスポーツ観・思想のなかでまだ解明されていない言説は実に多い。今回取り上げる、より早く、より高く、より強く；Citius, Altius, Fortiusもその一つである。

近代スポーツは、A.グットマン:Allen Guttmannが言うように、世俗、平等、専門、合理、官僚、数量、記録のキーワードで特徴づけられる。[4]この近代スポーツによって祭られるオリンピックをクーベルタンは“宗教的観念”として括り、人間教育の重要な場ととらえている。曰く、「スポーツは進歩への欲望に駆られ、危険を冒すことを省みず、集中的に行う筋肉運動の意志的習慣的崇拝行為である」つまり「意志的習慣的な儀式」である。そこでは率先、根気、集中、成就、勇気が求められている。[5]世俗化か宗教か、この聖・俗観は今日のスポーツを考える上で重要である。清水重勇が敢えてクーベルタンの所業をオリンピックにではなく、教育学に位置づけようとするのは、近代スポーツそのものではなく、人間教育にそれを見いだそうとしているからである。

より早く、より高く、より強く：Citius, Altius, Fortius の標語を巡って、これが如何なる意味をもつのか、その及ぼす影響は何か。以下ではこの問題を上記の視点から考えてみたい。

この標語は、後で詳しく触れるが、彼が敬愛するH.ディドン；Henri Didon神父の言葉をオリンピズムを表現するに相応しいものとして取り込んだものである。ディドン神父はドミニカ修道院の牧師であると同時にパリ近郊のアカーユ校の校長でもあった。彼は、早くも1894年、クーベルタンが近代オリンピックの復興を呼びかけたその年、生徒らが組織した学校間アスレティック大会（学校対抗フットボール大会）に勝利賞を提供するにあたり、ラテン語で“より早く、より高く、より

強く：Citius, Altius, Fortius ”という三つの言葉を語りかけた。この標語をクーベルタンはオリンピズムに取り入れ、瞬く間に世界に広がった。「その本質的な特性は、古典的な形で簡潔な三つの言葉で括られ、輝きを与えることになった。この新しい標語はより広範にそして当人が考えもしなかったほど高く評価されてきた。それをオリンピズムが素早く取り入れ、世界に広げていった。」[6]

J．マカルーン；J.J.Macaloon は、近代スポーツは世俗化のなかで合理性や記録性が意味をもつと言う。だとすれば、“ より早く、より高く、より強く ”の標語は、近代社会が合理性を追求し、科学の進歩に依存し、数量と記録に価値を見いだし、一歩でも、一秒でも早く前に進む競争社会の資本主義的な世界観と相通ずる表現ではないか。まさしく近代スポーツは近代社会の思想の上に成り立ち、その上で相互に関係し、刺激しあいながら発展してきたのである。

クーベルタンは、「筋金入りの右翼の闘志で、植民地主義者で、帝国主義者であると見なされなければならない」[7]と、J-M. ブローム：Jean-Marie Brohm によって否定的な人物として描かれることもある。確かにクーベルタンは、代々の土地貴族の家系に生まれ、政治的には曖昧で、ナチスとの関係が噂され、女性蔑視の保守主義者などと指摘される言説はある。だが、一連の彼の著作や行動からすれば、現実社会・世俗の煩雑なしがらみから抜けだし、新しい世界（青年が輝くスポーツの世界：オリンピック）を想定し、そこにおいて青少年を教育することが社会を刷新する一番の早道であると考えた、と読みとることができる。つまり現実では解決しえない諸問題を世俗から切り離し、信仰の世界で平静さを取り戻すことを彼は考えたと積極的に評価することである。

そのからくりは如何に説明しえるのか。J.マカルーンは、E.デュルケム；Durkhem Emile の『社会分業論』から、「複雑な、高度に分化された社会においては、社会に連帯感をもたらすための集団的表象は、必然的に抽象的にならざるをえない」ことを援用し、これをオリンピック復興にかけたクーベルタンの先見的洞察として以下のように結論づけている。「ヘレニズム」はおそらく、「パリ会議に集まった人々にとって、発展途上の近代スポーツ界につきまとっていた対立や派閥争いを、しばらくの間棚上げすることを可能にしてくれる、唯一の象徴・概念の集合体だった」。[8]

では Citius, Altius, Fortius の標語は、この表現に習って言えば如何なる意味をもつのであろうか。

## １．クーベルタンの使命感とスポーツ教育学

クーベルタンは、スポーツという文化に魅せられ、青少年の教育にスポーツが非常に有効であると考え、それをオリンピックという装置で社会的に認知させ、スポーツ教育の重要性を説き、実践することを自らの使命と考えていた。

クーベルタンは、スポーツをこよなく愛し、スポーツ文化に内在する諸価値を自由、公正、努力、自治、自己形成、相互敬愛、さらには民主主義、平和といった概念を含むものと捉えた。これらが何よりも青少年の教育に最も大切な要件であると考え、スポーツ教育学を構想することになる。このスポーツ教育学は、はじめ一国、つまりフランスの青少年に対する教育として考えていたが、やがて全世界の若者たちに対しても不可欠な教育であるとその視野を広げていくことになる。

このスポーツ教育学を如何に具体化し、説得的に展開していったらよいか、この考えを具体化させる方法としてクーベルタンは近代オリンピックの復活を構想し、その展開と発展に生涯を捧げたと言えよう。

### １）スポーツへの憧れ

クーベルタンが近代オリンピック復興を構想する契機は大きく二つあったと考えられる。その一つは、体操ではなくスポーツへの憧れであり、もう一つは「ヘレニズム」への憧れである。

1863 年に生を受けたクーベルタンは、1880 年にサン・シール陸軍士官学校に入学するが、そこでの自由の束縛・拘束、上意下達的人間関係など

の閉鎖的・閉塞的生活体験に嫌気をさし、ここをすぐに退学する。そして 1883 年イギリスに渡りハロー、イートン、ラグビー校などパブリックスクールでの生徒らの実に伸び伸びと、そして生き生きした自由闊達な学校生活とそれを生み出しているスポーツの役割を目の当たりにして、彼はスポーツの人間形成的魅力に取り憑かれた。当時、フランスの学校教育では、体操が支配的であったから、その厳格で、形にはめられ、おもしろくもない、スポーツ教育と比べてみると、そこには天と地ほどの違いを感じたのである。彼は、1901 年に 10 数年前を省みながら、体操について以下のような考えを綴っている。「スケート、スキー、水泳、ヨット、ですら体操研究所の活動に役立っており、その研究所の床もテニスを楽しめるようになっている。・・・科学的な体操が体育で重要な役割を演じてきた」とはいえ、それは「その愛好家ですら証明することができない」ほど、「兵士の育成準備にも、スポーツマンの要求を満足させることにもあまり役立たない」ものであった。[9]

この時期の体操とスポーツの相違については、J.マカルーンが言うように、「＜スパルタ＝ドイツ＝体操＞対＜アテナイ＝フランス＝スポーツ＞」[10]という図式で考えられていたと言えよう。クーベルタンは、さらに体操が「医学支配－軍事的要請－国家」の関係で捉えられているのに対し、スポーツは、「教育・心理学－人間形成－国民」と関係しているものという認識をもつに至っている。

クーベルタンのこのスポーツへの憧れは、トーマス・アーノルド；Thomas Arnold の教育理念・方法に感化されることで一層意識されるようになったと言えよう。その T.アーノルドの教育理念・方法が、第一に体育ついで徳育そして社会教育の順で重要視されることを受け、クーベルタンは「自由とスポーツ」がますます必要がある、と力説する。[11]

### 2）古代ギリシャ・ヘレニズムへの思い

スポーツへの憧れと同時にクーベルタンがもう一つ重要視したものに、古代ギリシャにおいて展開された「自由と平和な社会」への憧れである。

「自由とスポーツ」の原点は、「古代ギリシャ」のアテナイにあることに気付いてからと言うもの、ヘレニズムへの感心を深めていくことになった。当時、古代ギリシャへの関心は非常に高く、ヨーロッパ各国は競ってその発掘に向かっていたから、クーベルタンもまたその発掘の成果や研究に大いに刺激され、興味を膨らませることになった。例えば、1852 年、独のベルリン大学、エルンスト・クリチュウス；Curtius, Ernst の研究や彼の講演があったことを知り、P.W.ブルックス；P.W.Brookes が始めた「マッチ・ウェンブロック・オリンピック大会」(1849 年開始)を実際に見学し、P.W.ブルックスから詳細な話を聞き[12]、さらにはヴィクトール・デュリュイ；Duruy, Victor の『ギリシャ人の歴史』から多くの刺激をえることになった。

## 2．大衆化、国際化に向かう時代・社会

ところで、クーベルタンがスポーツ教育学の確立とその発展を展望するにあたり、時代的社会的影響が反映していたことを見ておかなければならない。ここでは、それを国際見本市（国際万博）の隆盛とスポーツの大衆化の 2 点に絞っておきたい。

### 1）国際見本市（万博）

万国博覧会は、すでに 1800 年代半ばには注目を集めていた。なかでもイギリスで興った水晶宮殿での万博（1851）は、「産業労働者搾取の新しくかつ悪質な一形態」と社会改革家に非難されるが、「イギリス国民の優越の証し」あるいは「工業・科学・技芸の新たな融合の証し」と誇らしげに讃えられ、その豪華さにおいて世界的に万博の名を知らしめたほどであった。[13]

クーベルタンが万博と接し、興味を抱いたのは、1878 年(当時 15 才)のパリ万博からである。ついで 1889 年のパリ万博は、原住民をも見せ物にした「民族動物園」などを登場させ、非人道的なイベントを企てたが、そこでは同時に「科学的民族

学や文化研究」と相まって「大衆」文化もまた「独自の方法を確立し精密化」する機会となった。[14] クーベルタンはこの万博の民衆化・大衆化とその国際性に、非常な関心を寄せた。

### 2）エリートスポーツから大衆スポーツへ

また万博は産業資本主義の世界拡大の場であり、産業社会の拡大に拍車をかける場であったために、農村から都市へ産業労働者が流入・増加する現象をも引き起こしていた。そこに登場した労働者たちがスポーツに関心を向け、スポーツに参加してきた。それまで上流階層の裕福な者たちだけで楽しんでいたスポーツが、徐々に労働者たちに広まり大衆化への流れが始まった。

例えば、当時人気を集めていた自転車の場合で見てみよう。自転車は 1891 年にはすでに 13 万 2 千台普及していた。また、人気を象徴するように自転車新聞が発行され売り上げを伸ばした。1891 年発刊の日刊『ヴェロ』（Vélo）が 1894 年には８万部に達し、1894 年には週刊『ヴィシクレット』（Bicyclette）が２万部も売れた。自転車競技への関心は、タイヤにチューブが用いられた 1890 年頃から、「世界で最も大衆化したスポーツの一つ」[15]になっていた。このように自転車は「見る」ものから「する」、行って楽しめるものとなり、大衆の文化として広がりを見せたのである。ちなみに 1903 年にはスポーツ紙の『ロト』がツール・ド・フランスを立ち上げ、国内の一大イベントとなっていく。また、労働者自転車連盟は 1896 年に結成され、1913 年には会員が１万人を数えることになる。[16]

労働者や大衆がスポーツを楽しむにつれクラブや連盟が立ち上がり、国内はもとより、国際的な組織化も進むことになる。1907 年、フランス労働者スポーツクラブが結成され、1913 年には国際労働者スポーツ連盟の結成をみるに至る。

## 3．オリンピックへの思い入れ

体操からスポーツへ、拘束から自由へ、エリートから大衆へ、一国内から国際化へ、スポーツへの期待はクーベルタンの中で大きく膨らんでいった。クーベルタンはスポーツが人間教育にとって重要な役割を果たすと考え、如何にこれを社会に認めさせるか思案する。そして時代のトレンドを追い風と見るやスポーツの国際化と大衆化をキーワードにオリンピックを立ち上げることになる。彼は言う。オリンピック大会の復興にはスポーツの大衆化が必要であり、それには「国際化が必要である」と。[17]

そのオリンピック復興は古代ギリシャの研究・発掘に触発された。それは、古代ギリシャ時代に 11 世紀以上も続いたオリンピックとそれを支えた社会の平和、そしてその両者の有効な関係とに理想的な人間・社会のあるべき姿を見いだしたからである。つまりヘレニズムへの思いはクーベルタンの中で荒れすさんだ社会や青少年の心と身体を再生させる、現世の救いの場として広がっていった。

彼は、人生の後半で「オリンピックは一つの宗教である」とオリンピックを思想化し、それをオリンピズムと表現するようになる。[18]クーベルタンは言う、オリンピズムは「競技的信仰」（religio athletao）であり、その競技の信仰者たちは「過剰の自由」（liberté d'excés）を欲している。なぜなら、強制され抑制された下での競技は単なるユートピアに過ぎず、そこには「自由」が決定的に不足しているからだと。「自由」の下での競技だからこそ“ Citius, Altius, Fortius ”の標語が掲げられるのであり、この標語は記録を破ろうとするすべての人に向けられているのであると。[19]

### 1）ヘレニズム回帰

「ヘレニズムとは何よりもまず、人間性を現世において、均衡のとれた状態において崇拝することである」。それはまた「完璧な平衡状態を実現している、現在あるがままの人間のあり方を肯定する精神」[20]でもあるとクーベルタンは見た。ヘレニズムは、「調和的な人間を目指しており、それは、倫理（la morale）、都市国家（la cité ）、個人（l'individu）間のバランスのとれた状態を模索す

る社会であり、同時に個人の信条、連帯、利害において調和のとれた状態を保つことを意味している」[21]社会である。そしてヘレニズムだけが、これをなしえた社会であると彼はそこに思いを馳せた。

激動する世紀を跨ぎ、社会的な変化が著しく、産業化が進展する一方で、多くの社会不安を抱えた現実を直視し、この状況を如何に平和な社会に導くことができるのか、青少年にとって如何に教育が可能なのか、を真剣に模索していたクーベルタンには、ヘレニズムの社会がまさしく理想郷に映ったに違いない。

ヘレニズムへの彼の憧れは、戦争が起きてもなお４年ごとのリズムを大切にし、オリンピックのために一時「休戦」する「平和」志向の社会に向けられている。この平和のための「休戦」こそ神に捧げる祈りの瞬間であり、この祈りこそが宗教的な行為として全アテナイの人々によって崇められた。だからかくも長い間オリンピックは継続したのである。連綿と続いたオリンピックを飾った運動競技はかくも人間や社会を平和で豊かにする多くの要素を内包していた。それは何ものにも優る価値である。

### ２）オリンピズムは一つの宗教である

ヘレニズムへの回帰は、すなわち古代オリンピックへの照射であり、古代オリンピックおよび個々の運動競技が社会と個々人の形成に果たしていた機能や役割を見つめ直す契機となっていた。クーベルタンは、オリンピズムの中心的な理念としてヘレニズムでの運動競技のあり方を意識し、「古代の運動競技(athlétisme)と同様に現代の運動競技もまた一つの宗教であり､崇拝行為であり､“遊びからヒロイズム”に至る情熱的な飛翔である」[22]と確信するに至った。

だがクーベルタンは、古代ギリシャや古代オリンピック大会を全面的に賛美していたのではない。J．マカルーンによれば、クーベルタンは、古代オリンピックの歴史において「さまざまな起伏や障害」があったことを指摘し､「聖なる休戦協定が時に破られたこと、開催者内部での分裂、また時には選手たちの不正があったこと」を見過ごしてはおらず､歴史を正しく理解した上で､「オリンピックの祭典が輝かしくも綿々と続いたこと」を賞賛し､「如何に重大な事件が起ころうとも､大会が中止されることはなかった」[23]ことを高く評価していた。[24]そしてヘレニズムでそれが可能であったのは、オリンピックと運動競技が「種々の高貴な特質」をもっていたからであり、ここにその最も大切な文化的な価値を見いだしている。

その高貴な特質とは、如何なる事態が起ころうとも４年に一度のリズムを刻み､11 世紀にも及んだ、全ギリシャ人のオリンピックに対する崇拝行為である｡オリンピック大会のための一時「休戦」という行為は、神々に捧げる「平和」への祈りであり、如何なる日常的な行為にもまして崇高な瞬間であったに違いない。この崇高な祭りを盛り上げたのが運動競技であった。

近代スポーツが「遊びからヒロイズムまで、質的な発展に至る情熱的な飛翔を遂げる文化」であると考えていたからこそ、彼は、その人間形成的な魅力に惹かれ、これが青少年教育に最も相応しい文化であると考え、スポーツの重要性を社会的に認知させるために近代オリンピックという大がかりな装置を導入した。

そこで、彼は､『スポーツ教育学』(1922 年）の冒頭で、スポーツが「進歩したいという欲望に基づいて、危険を省みず、一心不乱に行う意志的習慣的崇拝行為」であり､「自発性(initiative)、根気､集中､挑戦(recherche du perferctionnement)、危険の無視」の５つの本質的基本的な概念を内在させている、と説いた。

## ４．より早く、より高く、より強く：オリンピックの象徴概念

以上見てきたように、クーベルタンは、スポーツのもつさまざまな価値に目を向け、それらを積極的に青少年教育に取り入れようとしてきた。そしてそれらを可能な限り全世界の人々に理解してもらうことを望んでいた。何よりもオリンピック

大会の復興とその発展への努力がその最も象徴的な取り組みとして後世の人々に評価されてきているが、彼は、そのオリンピックやスポーツへ関心を向けさせるために諸会議を開催し、演説し、文章にしたためるなどさまざまな方法で、人々を引きつける言説を披露してきた。それらの中で、ピンポイントで彼の思いを表現する標語の活用は、全世界の人々の心を捉える上で有力な武器となっている。そして特にそれをラテン語で表現しているところに彼のヘレニズムへの思いとそこから世界へ向かおうとする姿勢が現れている。より早く、より高く、より強く：Citius, Altius, Fortius の標語もまた彼が好んで用いた重要な言説の一つであった。

### 1）象徴としての標語の重要性

標語の起源やその多様な表現についてクーベルタンも重要な意味を与えている。「標語は人間の欲求や本能に応えるものであり、古代社会の遺産でありながら、現代社会はそれを活用しているようには見えない。」しかし「もはやラテン語を使わず、それを忘れても何ら不都合でもなくなっている現代社会にあっても、なお威厳をもった簡潔な言葉を必要とし、第一級の必要な表現を標語に求め、強化し続けている。」[25]

標語をラテン語で表記するもう一つの意図を彼は“世界で共通理解しえる言語”に他ならないからであると言う。1923 年、アフリカの青年たちにスポーツ活動を広める目的で、「アフリカ賞碑」のメダルがエジプトの IOC 委員によって設けられた際、そこに碑文として「己を知り、己を導き、克己することが競技者の義務であり本性である："Athletae proprium est se ipsum noscere,ducere et vincere" 」が刻まれた。[26]

なぜラテン語か？それは、アフリカにおいては英語、仏語、独語、伊語、ポルトガル語のどれ一つとても植民地支配言語となってしまい、またアフリカの言語と言ってもいろいろあって一つの言語だけを採用するわけにはいかない。ラテン語であることによって誰もが理解でき、政府高官や伝道師らもそれぞれの地域言語に翻訳しえる。だからそこに表現されている主張は、「筋肉の地平から倫理の地平へ」と広げられ、「スポーツ教育学」の根本問題にまで触れられることになる。[27]

ところがそれほど有効な標語でありながら、現実的に正しく使われておらず、現状に活力を与えるようなものになっていないことをクーベルタンは憂い、新たな標語の必要性を痛感する。そして、「健全な精神は健全な身体に宿れかし」の標語に新たな活力を吹き込んだ。「それら（これまでの標語－引用者）に吹き込まれた理念・考え方(idees)の多くは非常に貧弱なものになっている。・・・心身の調和についてはあの有名な健全な精神は健全な肉体に宿れかし：Mens sana in corpore sano[28]が引き合いに出されるのだが、それは多くの貧弱なイメージしかもたない説教家が臆面もなく乱発する常套句となってしまっている。」[29]

そこでクーベルタンは改めてその正確な意味づけと使用を促すことになった。彼がはじめにこの標語問題に言及したのは、1911 年のことである。この時は、ローマの作家ユベナル；Juvenal が屈強な競技者に欠如していた精神性を嘆いて言ったという「健全な精神は健全な肉体に宿れかし」の標語に対して、これをもっと生き生きとした表現とするために「燃えさかる精神は鍛えられた身体に宿る；Mens fervida in corpore lacertoso」と言い換えた。

クーベルタンはこの標語を掲げた経緯について次のように語る。形式化された「健全な精神は健全な身体に宿れかし」の標語は、「少し医学的な発想に基き過ぎていて、スポーツマンたちへの野望として示されていない」、つまり「最高に衛生的な健康状態を意味してはいるが、運動選手にはほとんどあり得ない」。[30]人々が実際「オリンピックに願うことは、精神が燃え上がり、鍛え抜かれた肉体となること」である。そこで彼は、この意味をうまく表現している言葉を「ラテン語学者でスポーツ贔屓な M．モルレ氏に要請」し、「キケロの言葉」からヒントをえて、練り上げた。決して即興的な出任せからではない。[31]彼はまた次のよう

にも説明している。「燃えるような心、鍛え抜かれた肉体、筋肉の活発さあるいはむしろその完成された筋肉の活発さに対する精神の活発さ、これぞ近代教育学が敢えて明確にしたことである」と。[32]

### ２）オリンピックの象徴概念：Citius, Altius, Fortius

以上見たように、クーベルタンの思いは、スポーツ教育学に向けたスポーツ論であり、オリンピズムであり、それは「人類の春」を迎え、全世界の人々が祝う「宗教的祭り」によって平和な社会を作り出すことである。その大切な場が４年に一度のオリンピック大会であり、ここで演じられる近代スポーツの役割は極めて重要になっている。

巷で騒がれているアマ・プロ問題や、それを誘発させるエリートのスポーツの囲い込みや商業主義の横行などスポーツ活動の逸脱行為がオリンピック大会に常に付きまとっている問題を意識しながら、クーベルタンはそれらに打ち勝つための成句を高々と掲げ、正義を味方に果敢に事を進めてきた。

今日好んで用いられる“オリンピックで大切なことは、勝つことではなく参加することである”をオリンピックの象徴的思想として広めたのもその一つである。

オリンピック大会が単に記録や勝敗を競う場だけではないことはすでに見てきたが、これを端的に表現した言葉としてこの成句が用いられている。「勝つことではなく参加すること」が大切であるとするのは、オリンピック大会が「４年に一度」の「人類の春」を祝う祭りであり、その祭りは観戦者も含めた全参加者によって盛り上げられるものだからである。

このクーベルタンの言説は、元々は、1908 年のロンドン大会前、英国教会のペンシルバニア司教：L'èvêque de Pennsylvanie が大会参加者を前に「聖ポール教会」の礼拝で語った言葉である。クーベルタンはこれを英国政府主催のレセプションで引用したものである。

その挨拶でクーベルタンは、横行している“Fair play”の欠如に警鐘を鳴らし、行き過ぎた勝敗へのこだわりを戒め、本来の趣旨がどこにあるのかを世界に向かって再確認しようとした。そこで、ペンシルバニア司教の言葉に続けて“人生で大切なことは、成功することではなく、戦いに挑むことである。つまり本質的なことは、勝利を手にすることではなく、如何に戦ったかである。”そして続けて、この教訓を「世界に広めていくことは、より勇敢でより力強い、従ってより良心的でより高潔な人間を作ること」[33]であると強調した。

オリンピック大会は参加することに意義があるからと言って単なるスポーツ競演会であっていいというのではない。スポーツの本質を正確に見極めた上で、そこに示される真剣な行為こそが最も尊い価値であり、この価値が理想的な人間を作り出す源泉であることを常に彼は訴え続けてきた。「われわれは、スポーツからえられる物質的精神的なあらゆる有益性を見てきた。だがそれ（スポーツ）が取り返しのつかないほど行き過ぎる傾向があることも知っている。しかし、それがスポーツの本質であり拭い去ることのできない特徴なのである。この基本的な原理を変えようと望むことは妄想を追いかけることに等しい。決して**より早く、より高く、より強く**の標語から逃れることはできない。つまり口先だけで真のスポーツマンやスポーツメンであることから逃れることはできないし、そこに潜む危険から手を引くこともできない。だからやるべきことは、彼ら（スポーツマンたち；訳者）の野望が絶対的なものとなり過ぎないように緩和してあげることである」。[34]

クーベルタンはこのように「より早く、より高く、より強く」というディドン神父の標語を紹介した上で、重ねて記録への挑戦の意味を説いた。「記録に向かって一つ一つ段階的に、お互いが切磋琢磨し、早さや忍耐性や快活さによって次ぎ次ぎにえられる記録は、・・・スポーツにとって、つまりあらゆる活動においてまさしく不可欠な偉業として、必要不可欠な記録に意味を感じている民衆によって賞賛されているものである。」そしてこの標語は、1914 年のパリ会議のエンブレムとして

示された五輪と共に、そのプログラムに書き込まれたことで、「すべての国の青少年に心地よい響きとなって求められ・・・スポーツが根付いた至る所でその象徴的な五輪とともにこれを読みとれる」ことができるようになったのである。[35]

より早く、より高く、より強く：Citius, Altius, Fortius の意味するものは決して短絡的な記録への挑戦ではない。それ故、決して近代合理主義の先兵を意味するものでもない。人は何故に“より美しく”を加えなかったかと問う。ディドン神父が説いた時点では、確かにまだ「美」をスポーツに求める状況にはなかったかもしれないが、1912年の第５回ヘルシンキ大会では文学や芸術をもオリンピック大会に加えることを提唱し、自らも匿名で「スポーツの頌歌」[36]を投稿し、見事金賞を獲得しているのであるから、“より美しく”を加えても良かったのではないか。この疑問に如何に答えうるか。さらなる研究が待たれるが、しかし、見てきたように「より早く、より高く、より強く」が個々の技術的な課題克服だけを意味するのではなく、ひとまとまりの表現としてスポーツに対する精神的な飛翔あるいは精神的な昇華を意味していると解釈するのであれば、この３つの言葉で十分に“より美しく”を表していると読みとることができる。ここでもまたデュルケムの『社会分業論』に倣って、この標語はスポーツやオリンピックの「唯一の象徴・概念の集合体」と言うことができるのではなかろうか。

“より早く、より高く、より強く”さらなる論議を続けることがクーベルタンの願いであったに違いない。

---

1 J.J.マカルーン/柴田ら訳『オリンピックと近代評伝クーベルタン』平凡社、1988、p.533

2 クーベルタン自身の著作をはじめ彼の思想や人物伝に関する研究は、何人もの研究者らによってすでに大著が書かれている。1975 年までは、Carl Diem(ed.), Pierre de Coubertin OLYMPISCHE ERINNERUNGEN, 1959（大島鎌吉訳『ピエール・クーベルタンオリンピックの回想』1962）、 Yves Pierre Boulongne, La vie et l'ouvre pédagogique de Pierre de Coubertin 1863-1937, LEMEAC, 1975 に、それ以降は Norbert Müller(ed.),Pierre de Coubertin Texites Choisis, Tome Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ, Weidmann, 1986、 J.J.マカルーン/柴田ら訳『オリンピックと近代 評伝クーベルタン』平凡社、1988、Guttemann, Allen, The Olympic, a history of the modern games, UIP, 1992 を、わが国では清水重勇『スポーツと近代教育 フランス体育史 上、下』紫峰図書、1988

3 Pierre de Coubertin,Les Assises philosophiques de l'Olympisme moderne, Le Sport Suisse,31e année 1935, in Norbert Müller(ed.) , Pierre de Coubertin Texites Choisis Tome Ⅱ, pp. 435-439, 1986.
なお、ドイツ語版の邦訳は大島鎌吉訳『ピエール・クーベルタンオリンピックの回想』1962,pp.201-207 を参照

4 A. Guttmann, From ritual to record; The Nature of Modern, Colombia University Press, 1978, p.85.
清水哲男訳、『スポーツと現代アメリカ』TBS ブリタニカ、1981, p.141

5 Pierre de Coubertin, Pédagogie Sportive, p.2, Librairie J. Vrin 1972. 初出 1922.

6 Pierre de Coubertin, Bulletin du Bureau International de Pédagogie Sportive, Lausanne, №4, pp.12-14,1929. in Textes Choisis Tome Ⅱ, p.454

7 Jean-marie Brohm, le mythe olympique, Christian Bourgois Editeur, 1981

8 J.J.マカルーン/柴田ら訳『オリンピックと近代評伝クーベルタン』平凡社、1988, p.348

9 Pierre de Coubertin, Notes sur l'Education publique, Paris, Hachette, 1901, pp.198-216, in Textes Choisis Tome Ⅲ, p.381

10 J.J.マカルーン、前掲、p.291

11 J.J.マカルーン、同上、p.136

12 クーベルタンは、1887 年からの『21 年間の戦い』を開始するが、その始まりの年の 10 月、ウエールズの外れの大衆スポーツが盛んな小都市で、すでに年老いてはいたが P.W.ブルックスから熱烈な歓迎を受けた、と述懐している。（P. de Coubertin, Une campagne de vingt-et-un ans (1887-1907) Paris ,

1909pp.43-53. in Textes Choisis Ⅲ, p.93.）

[13] J.J.マカルーン、前掲、pp.268-269

[14] J.J.マカルーン、同上、p.278

[15] André Noret et Raymond Thomas, Le cyclisme, Presses Universitaires de France, p.15

[16] René Moustard, Les sport populaire, Edition Sociales,1983. 早川武彦訳『フランスのスポーツ運動』青木書店、1987

[17] Pierre de Coubertin , Le Congrès de la Sorbonne, Une Campagne de vingt-et-un ans (1889-1908), Paris 1909, pp.89-98. in Textes Choisis Tome Ⅱ , p.115

[18] 清水は、著述の題目として「オリンピズム」という用語の初出が 1932 年の『オリンピック礼讃』であるのは「意外な事実」であるとしている。（清水重勇、前掲、p.826）

[19] Pierre de Coubertin、op.cit.、1935. in Textes Choisis Tome Ⅱ, p.436「近代オリンピズムの哲学的基礎」p.203

[20] J.J.マカルーン, 前掲、p.287。Histoire universelle, 1919

[21] Pierre de Coubertin, A travers l'histoire grecque, in Revue Olympique, avril 1906, p. 57. in Textes Choisis Tome Ⅱ, p.31

[22] Pierre de Coubertin, Olympie, 1929. in Textes Choisis Tome Ⅱ, p.428

[23] Pierre de Coubertin, Olympie, Le Sport Suisse, 25e année, 1929. in Textes Choisis TomeⅡ, p.419

[24] J.J.マカルーン、前掲、p.290

[25] Pierre de Coubertin, Bulletin du Bureau International de Pédagogie Sportive, Lausanne(1929), №4, pp.12-14. in Textes Choisis Ⅱ, p.454

[26] 「己を知り、己を導き、克己することが競技者の義務であり本性である："Athletae proprium est se ipsum noscere,ducere et vincere"は、身体的な力を精神的倫理的な力に転化しえることを強調するもので、クーベルタンがスポーツ教育学で示した明確な考えに基づくものである。しかし 1923 年に用いられたこの標語は重要視されていない」と言う。(Pierre de Coubertin, ibid.,p.453)

[27] Pierre de Coubertin, ibid., p.455

[28] Pierre de Coubertin, Revue Olympique, juillet 1911 , №67, pp.99-100

[29] Pierre de Coubertin, op.cit. in Textes Choisis TomeⅡ, p.453

[30] クーベルタン研究の第一人者であるノベルト・ミューラーもまた、より早く、より高く、より強くの標語がスポーツの達成を目的としたものであるのに対して、こちらは医学的な観点から身体と精神の調和的な観念に向けられたものであると説明している。(Pierre de Coubertin, in Textes Choisis Tome Ⅱ, p.453)

[31] Pierre de Coubertin , Revue Olympique, juillet 1911, pp. 99-100. in Textes Choisis Tome Ⅰ, pp.603-604

[32] Pierre de Coubertin, op.cit.. in Textes Choisis Tome Ⅱ, p.453

[33] Pierre de Coubertin, Revue Olympique、juillet, 1908, pp.108-110p. in Textes Choisis Tome Ⅱ, p.449

[34] Pierre de Coubertin, Notes sur l'Education publique, 1901, in Textes Choisis TomeⅢ, pp.381-382

[35] Pierre de Coubertin, ibid. in Texets Choisis TomeⅡ ,p.455

[36] Pierre de Coubertin, Revue Olympique, déc. 1912, pp.179-181. Brochure Spéciale, Lausanne 1912. in Textes Choisis TomeⅢ, pp.665-667.
クーベルタンが第５回ヘルシンキ大会の芸術オリンピック大会の芸術部門に匿名で応募し、文学賞を得たもの。おおスポーツよ！ではじまる９節のスポーツ讃歌。神々の愉しみ、美、正義、勇気、名誉、歓喜、豊かさ、進歩、平和を歌いあげている。邦訳に清水重勇『スポーツと近代教育　フランスの体育史下』（紫峰図書、1988、pp.802-805）がある。